様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科研費 KAKENHI

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １０ 日現在

機関番号：１５４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2023
課題番号：１８Ｋ００９６３

研究課題名（和文）古代中世移行期における交通システムの展開

研究課題名（英文）Development of Transporation System in the transition Period of the Ancient Middle Ages

研究代表者

西別府　元日（Nishibeppu, Motoka）

広島大学・人間社会科学研究科（文）・名誉教授

研究者番号：５０１３６７６９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）： 駅家の設置と維持によって実現される古代国家の交通システムが、律令政治体制の「衰退」（変質）のなかで、どのように変化しながらも、平安時代後期から鎌倉時代にかけて変貌していくのか。駅家体制の主目的である公的使者・旅行者への「供給」（宿泊と食事等の提供）と「逓送」（使者の移動手段の確保と運搬）の変化という視点から、追究するとともに、その様相が変化していく背景に、各地域における人びとの社会経済活動（農業生産活動の変化や地域社会の様相の変化）があるのではないかという視角から検討を加えた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　研究開始の段階では、古代国家の駅家が設置された地域における考古学・歴史地理学的な実態調査をふまえ、中世社会への転換以後における当該地域の変容を検討することによって、変容の社会的意味を追究することをめざしたが、2018年西日本豪雨による移動手段の壊滅的事態の出現、さらには2020年以後におけるコロナ感染症対策にともなう移動の制限などの事態をうけて、研究の対象地域も大幅に限定せざるをえなくなるとともに、他地域との対比的な考察も限定的なものとせざるをえないものとなった。こうした視点や方法論の変更を余儀なくされたことよって、地域交通の要的な「古道」の具体的な様相を歴史地理学的視点から追究した。

研究成果の概要（英文）：The transportation system in the ancient Japan was composed by building and maintaining station houses. How did this system change in the “decline” (transformation) of the Ritsuryo; political system? And after that, how did it change from the late Heian period to the Kamakura period?
This study explores these transitions not only from the viewpoint of the main function of the station system — “kugo” and “teiso” to official emissaries and travelers (providing accommodation and meals, and giving transportation means and support) — but also from a socio-economic perspective on the influence from changes in agricultural production and changes in the local communities.

研究分野：日本古代史

キーワード：駅家・駅制　駅家雑事　供給　荘園公領制　別符　一国平均役　宿

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　C－１９、F－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

今回の研究の前提となる、古代（奈良時代）から中世（鎌倉時代）への移行期における交通システムへの展開については、古代から中世の交通システムの変遷を、ひとつの変遷過程として考える視点・立場が不十分・希薄であることを痛感していた。いわば、断絶したそれぞれの時代の交通制度を整理・理解し、その相違などを明らかすることが研究方法上の主流であり、それぞれの時代の社会・経済システム上の諸課題にもとづくものとしてその相違点が現出し、それらが、それぞれの時代の社会・経済的な諸課題に起因するものかを考究し、どのような時代的背景をもつものか等々を考える視点が、一部の研究者を除き、意識されてなかったように思われる。とりわけ、鎌倉時代を朝廷と幕府という二つの政治機構の並立期としてとらえ、両者の政治権力の歴史的相違を無前提に継承しながらも、両者が併存しているという時代観が維持されてきたため、両者が併存する状況・構造を統一的に模索・追究する努力の障害になっていたともいえよう

２．研究の目的

そこで、古代の交通制度の基礎であり、列島を区分する７つの行政区画「道」とそこに設置された国ぐにの中心地である国府をつなぐ主要な道路（七道）に設置された「駅家」と、中世初期（平安時代中後期ないし鎌倉時代初めごろ）から歴史的に登場し、人びとの移動にさいして利用される主要な街道に形成・登場してくる「宿」の政治的社会的基盤やその運営主体などに着目・検討しながら、「宿」の立地や所在地などの類似性・共通性などの側面、主要な道路や河川との位置関係の類似性（継承性）などの共通性、寺院・神社など主として宗教的施設との関係性・近接性などの面を検証･配慮しながら、現地の歴史的･地理的特徴に配慮しながら考察するという、歴史地理・考古学的方法論にもとづく検証をすすめるとともに、「駅家雑事」とも総称される一国平均役的な「供給」「逓送」など公共的交通機能を担うべき継承者ともいえる在地領主（平安後期から鎌倉期における地域社会の政治的・社会的な中核的存在ともいえる在庁官人や郡・郷司など）あるいは名主的生産者の存在形態や、その諸活動を表現・反映する諸史料を吟味する文献史学的方法論にもとづいた歴史学的検証過程を、統合的に検討する一連の作業行程として設定・整理しうるものであった。

しかし、研究の開始当初における西日本豪雨や、その後のコロナ感染症の流行による「移動」制限の長期化などで、「駅家」「宿」の故地にかかわる現地調査や、その周辺地域、さらには新たに登場してきた「宿」に関しての地域的様相や、当該地域の諸課題をとらえなおすための、フィールド調査や、各地域で蓄積されてきた研究データーやその成果を集成した編纂物の探訪等々をはじめとするその他の、調査等々がまったく不可能となり、研究方法や対象地域についての全面的な見直しを余儀なくされた。

３．研究の方法

そのため、とりあえずは中世関係史資料（『平安遺文』や『鎌倉遺文』、史料大成などの記録類）に登場する「宿」地名を収集するとともに、その成立の経緯や、政治的社会的役割、運用・機能面での政治的背景等々に拡大しようと試みたが、これらに直接かかわる文字資料が希薄であること、またそれらにかかわる研究文献に関する情報も容易に入手しがたいこともあって、これらを体系的にすすめることが困難なことを痛感するようになっていった。こうした反省とともに、コロナ禍での移動の制限という制約がつよいことなども考慮して、対象フィールドを申請者が居住する周辺地域に限定してすすめておくことが、現時点で最良の方向であることを、研究状況を進展させていくうえでも、最も適切な方向であることを痛感するようになった。その結果、地域社会の変化、とりわけ政治的変遷、地域における社会経済的変化等々の面から、地域社会の変化やその歴史的変化にアプローチすることにつとめたが、伝承的史資料・古地名・伝承などからうかがわれる歴史的動向や、その要因を明確にしていく作業がやや希薄になってしまったこともあり、その歴史的「伝承」の意味合いを評価するという視点からみれば、やや物足りない側面がのこったように考えている。

４．研究成果

以上述べたように、三河・遠江の愛知・静岡県境域など調査を実現しえた２，３の地域を除くと、広島県域外における「宿」に関連する地名をもつ地域のフィールド調査の断念･制限という、当初設定した研究視点からすれば、致命的な制約や、それにともなう歴史的史資料の収集に制限をうけるという事態のなかで、当初の研究方法や目標からすれば、大幅な変更を余儀なくされることが多々存在していたと考える。しかし、そうしたなかで、広島県域の一部地域のフィールドワークを中心とする地域社会の交通システムの変化や、その結果として登場してくる地域社会の変貌を追究した論文「地域社会の変貌と歴史の道」（内海文化研究紀要 48 号：以下論文ア）と、「地域社会の変容と交通機能」（内海文化研究紀要 52 号：以下論文イ）という論文によって、地域社会の変質・変容を考える作業のなかで、交通機能や体系が大きく変化していくことを確認できたことは、大きな成果であった。とりわけ前者：論文アは考古学的史資料を丹念に解きほぐし、

その変化を地域社会のなかでの移動経路の変化や、地域社会の政治的・経済的動向を表現する主体の変化を反映したものと把握しうること、その変化が地域社会の歴史的展開と即応していることを明らかにしたものであった。これに対し論文イで考察した問題は、交通機能上の要衝にあたる集落なり地域社会の核になる集団が、経路や交通体系上の位置づけによって、多様な変化を余儀なくされることを文献史料をもとに考察したものであった。この２本の地域社会の交通を考える論文によって、地域社会での交通体系の歴史的推移とその意味、地域的特質や変質の方向性などを考察する過程で一般化しうる面と、地域社会の政治的・経済的独自性、ないしは地形的要因に起因するものとして、性急な一般化を躊躇せざるをえない面が、多々存在することを痛感することができたことは大きな成果であったといえよう。今後は、検討する地域の多様性への配慮を前提にしながら、両者をしわけする視点や基準を模索する必要があることを痛感している。地域の特性や、歴史性、残された史資料のあり方などをふまえながら、それぞれの地域の交通大系を考察する必要を痛感した次第である。

なお、今回の科学研究費補助にともなう研究上の成果や残された課題などとして強調すべき点を、より具体的に整理しておきたい。

（1）　安芸国を中心とした古代から中世における山陽道の経路を、より具体的かつ長期的に，検討・想定することができ、一定の提言をすることができた。とりわけ、時代によって、古代山陽道が、比較的山がちの地域を経由することが多かったなかで、内海交通の進展のなかでその盛行を確認しうる地域が登場するとともに、その南北交通の経路上古代山陽道との交差する地域のなかに「宿」的変化をとげる地域が想定しうるようになった。

また駅家想定地における「供給」、「逓送」役の住民への転化に失敗するなかで、「駅家」とは無縁な地域が、その役割を担いうる存在へ、成長・変化していく状況が見られるようになった。その、要因は駅家的存在とは無縁な港湾的施設の設定が可能な地域におおく想定しうるようであり、水上交通への発展にともなう両者の役割の相違にあったようにも考えられるが、地域にのこされている史料では全面的に明らかにしがたい部分もあるようである。

いずれにしても、古代陸路を中心とした駅家から「宿」の展開のなかに、内海水路の安定化とそれを利用した人びとの移動の活発化をふまえることが不可避であることを想定できた。

（2）　古代山陽道と古代山陰道との連結が想定される備後北部の交通的要素の歴史的展開を検討するうえで、宗教的遺構・遺物、それを担う手工業生産者の移動、その他の面からアプローチすることができた。その歴史的前提として、大化前代の部民制的結合の残存や、編戸制の展開に際しての地域毎の結合などに配慮する必要があると考えるが、その点は今後の課題としたい。また、その伝播的要素の前提として、畿内と吉備地域との「知識」的な結合形態＝宗教的結合を媒介とした交通的側面を、想定しうる可能性があることを言及した。いずれにしろ、古代社会のなかで、広範囲におよぶ、人間の移動や情報の広がりに注目する必要があることを改めて痛感させられ、今後の交通史的研究の、思索の前提として位置づけるべきことであると考える。

（3）　古代山陽道の駅家「安芸駅家」「荒山駅家」の所在地の比定とそれぞれの地域社会の構造、消滅にいたる歴史的経緯をある程度想定・確認しながら、それぞれの周辺地域社会の歴史的展開のなかで一定の方向性にもとづいて追究することができた。ただ、今回の科研の調査中に、国の史跡指定をうけた「安芸駅家」（「下岡田官衙遺跡」）の遺構が９世紀前半期には消滅することが明らかになった。この遺構を継承する駅家的性格をもった遺構は現在のところ他の箇所では確認できなかったが、当該地域は 12 世紀後半には「国府」的機能を果たしていることは文献史料でも明らかにすることができるので、中世初期の国府を考えるうえで、守護勢力の地域支配、ひいては、中世の交通体系を考えるうえで、重要な視点を確立することができたように思われる。

（4）　中世初期社会においては、想定以上に朝廷・幕府からの使者派遣が活発であったことを確認しえた。こうしたシステムは、従来の朝廷・幕府間の「協調」的姿勢の一定の反映と見なすことも可能である。朝廷からの遣使が、鎌倉時代の全国的支配のなかではたした役割や意義を、今後検討していくことが必要であると考えている。

（5）　従来、歴史学のうえでは、やや異質的資料として、内容的に現実的歴史過程からやや断絶したものと考えてきた説話集や紀行文においても、実態的に読み直すことによって、文献史資料との統合化が可能であることが確認できた。

（6）　地域研究の過程で、当該地域の交通体系上、きわめ重要な交通の要衝とされる地点において、近年の自然災害の頻発等を反映するかのように、変質・崩壊が進行している状況などを確認できた。変質・崩壊を阻止しつつ、歴史的文化財として再生させていく方向や方法、その手立て等を早急に検討する必要があることを痛感している。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 西別府　元日	４．巻 52号
２．論文標題 地域社会の変容と交通機能	５．発行年 2024年
３．雑誌名 内海文化研究紀要	６．最初と最後の頁 1，20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 西別府　元日	４．巻 504巻
２．論文標題 「豊後国風土記」と古代の豊後	５．発行年 2022年
３．雑誌名 西日本文化	６．最初と最後の頁 15-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 西別府　元日	４．巻 第15集
２．論文標題 寺町廃寺跡と三谷寺	５．発行年 2022年
３．雑誌名 史跡寺町廃寺跡（広島県三次市文化財調査報告書）	６．最初と最後の頁 270-295
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 西別府　元日	４．巻 I
２．論文標題 下岡田遺跡出土の木簡と文書函蓋	５．発行年 2020年
３．雑誌名 下岡田遺跡発掘調査報告書	６．最初と最後の頁 148-157
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 西別府　元日	4．巻 I
2．論文標題 安芸国古代山陽道と下岡田遺跡	5．発行年 2020年
3．雑誌名 下岡田遺跡発掘調査報告書	6．最初と最後の頁 172-186
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 西別府　元日	4．巻 48
2．論文標題 地域社会の変貌と歴史の道～賀茂台地北部を事例として～	5．発行年 2020年
3．雑誌名 内海文化研究紀要	6．最初と最後の頁 1-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 西別府　元日
2．発表標題 古代官道の渡河方式について
3．学会等名 中国四国歴史学地理学研究総会日本史部会
4．発表年 2019年

〔図書〕　計2件

1．著者名 西別府元日	4．発行年 2022年
2．出版社 筑摩書房	5．総ページ数 381
3．書名 世界遺産の日本史	

１．著者名 西別府　元日	４．発行年 2019年
２．出版社 八木書店	５．総ページ数 391
３．書名 日本古代の輸送と道路	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関